OCC メディカル・カフェ　ニュースレター 『賢明な寛容:the wise patience』 第 29 号

2025 年 5 月　発行『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』

ニュースレター第 29 号をお届けいたします。 今号は樋野先生とスタッフの戸田が担当します。

『交流の場』 ～ 温かく迎い入れる『真摯なる姿』 ～

樋野興夫（順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長、恵泉女学園理事長）

2025 年 5 月 24 日、早稲田大学エクステンションセンー(中野校)での講座【ジャンル人間の探求:がんと生きる哲学 医師との対話を通して『がん』と生きる方法を考える。テキスト:『新渡戸稲造 壁を破る言葉』（三笠書房）】から、2012 年 5 月 26 日スタートした【<がん哲学外来> お茶の水メディカル・カフェ in OCC】(代表者：大嶋重徳先生　担当者：増田謙氏　司会：山﨑智子先生)に向かった。 多数の参加者であった。 私は、別室で 4 組(6 人)の個人面談の機会も与えられた。

今回、長野県長野市の愛和病院副院長である平方眞先生との面談の機会も与えれた。5 月 18 日長野県善光寺宿坊での『がん哲学外来長野門前カフェ・ロータスカフェ』（代表：中村純子氏）に参加されたとのことである。 長野県の愛和病院でも『がん哲学外来・カフェ』が開設される予感がする。

1860 年代遣米使節団(勝海舟:1823-1899 らがいた）は、ニューヨークのブロードウエイを行進した。 彼らの行進を見物した詩人ウォルター・ホイットマン(Walter Whitman, 1819-1892)は、印象を『考え深げな黙想と 真摯な魂 と 輝く目』と表現している。 この風貌こそ、現代にも求められるのでなかろうか!

『人間の心というのは、言葉を糧としている ＝ 対話の場 ＝ お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』の必要性を痛感する日々である。

（次ページへ続く）

あらゆる人々が立場を超えて集う『交流の場』で、温かく迎い入れるスタッフの皆様の【『心温まる賢明な寛容性』＆『熱意と真摯なる姿』】には、ただただ感服する。

【『起こったことは 仕方がないのだから、そのことを前提に 最善を考えよう』＆『Union is Power』（協調・協力こそが力なり：新渡戸稲造(1862-1933) 】の実践が、『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』の心得でもあろう！

あらゆるものに反応するのが…対話?!

私事ですが色々な事が重なり、一時的に声が出なくなりました。いつもは２～３日で治るのですが…今回は１週間たった今でも声は出ますが、変声期の少年のような声です(苦笑)

感染症ではないので他の人に影響を与えることはないのですが、声の出ない人、声がしゃれた人、咳をしている人などに対する世間の目は…わたしが思っているよりとてもシビアなものであると実感。もちろん、イヤな顔をする人ばかりではなく労いのお言葉をかけてくれる人もいますが、どちらかと言えば…怪訝そうな視線を向ける人が多い気がします。

※ちなみに、咳は反射によって出るものであり風邪をひいた時にだけ出るものではありません！アレルギーや乾燥によって誘発されることもありますし…しゃがれ声も同様です。

声は想いを相手に伝えるためのツールのひとつとして用いられるもの。であれば…伝わればどんなカタチの声でも声は声。伝えることができれば声の役割は果たされているのでは？といいたいところですが…その声質であったり、高低・速度・大きさなどの影響力を実感しました。

人は気にしていないようで、無意識に相手から発せられるあらゆるものに反応している

メディカル・カフェには様々な境遇の方が集まり対話が行われます。時に、自分の想いを伝えるためのツールが異なることもあります。でも、同じテーブルを囲むことでそんなツールを飛び越えその人から発せられる色んなものに反応することができるからこそ対話が成り立つのだと思いました。

反応とひとくくりに言いましたが、これもまた様々であっていい。どんな反応をするのかは相手次第。であり、はたまた…どんな風に発するかもわたし次第。それがややこしいところであり面白いところ。だから、自分の反応を素直に楽しみつつ、これからも対話に参加していきます。

スタッフ一同、いつでもご参加をお待ちしております。

お茶の水がん哲学外来・メディカル・カフェ in OCC スタッフ　戸田 裕子